

## 神に栄光、地に平和

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 勝彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24750">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24750</a>

# 「神に栄光、地に平和」

総合人文学科教授

佐々木 勝彦

ルカによる福音書、第二章一〜二〇節

13 すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

14 「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

(第二章一三〜一四節)

今日の話は、前半と後半に分かれています。前半では、聖書に何が書いてあるのかを実際に読み、その歴史的背景を辿ってみます。そして後半では、この聖書の話が私たちとどんな関係があるのかを考えてみましょう。

ルカ福音書第二章は、「イエスの誕生」という小見出しがついているように、イエス・キリストの誕生について語っている個所であり、このあとには「羊飼いと天使」の話が続きます。なおこの前の第一章には、洗礼者ヨハネの誕生にまつわる話と「イエスの誕生の予告」「マリアのエリザベト訪問」「マリアの賛歌」の話が記されています。

ルカによると、「イエスの誕生」は、皇帝アウグストゥス（前二七〜後一四）がローマの皇帝であったときに起こった出来事です。このローマ皇帝は「全世界の救い主」と称され、彼の時代は「アウグストゥスの平和」と呼ばれました。これらの称号および賛辞は、当時のローマ帝国が政治的にも経済的にも安定していたことを示唆しています。それにしてもルカは、なぜこのように世界史的な事件から説き起こすのでしょうか。それは、ローマから見ると、帝国の端の端に位置するパレスチナで起こった話です。その答えは、この記事の後半で明らかになります。

事件が起こった場所は「ベツレヘムというダビデの町」です。ヨセフとマリアがガリラヤの町ナザレから向かった「ベツレヘム」という町は、「ダビデの町」とも呼ばれていました。この地は、今から三千年ほど前に統一王国を建設したダビデ王が、幼年期に羊飼いをしていたところだからです（サム上二六・一八）。その統一王国が分裂して崩壊し、やがて捕囚を経験した後の人びとは、この地から、ダビデのような「平和」をもたらす救い主が生まれると期待していました（ミカ五・一―五）。

六節以下にはこう書いてあります。「彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶のなかに寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。」イエス・キリストの生まれた場所は、皇帝の住む宮殿の一室でも、宿屋でもあり

ませんでした。それは人間以下のものとみなされていた家畜小屋でした。

八節以下には「羊飼いと天使」の話が続きます。羊飼いの働く場所、それは皇帝の住む都市でも、宿屋のある町でもありません。それは、悪霊が住むと人びとから恐れられていた辺境の地です。神の喜びの知らせは、まず、この辺境の地に住む羊飼いたちに伝えられました。

一一節に出てくる「メシア」とは、元来、王や祭司になるための就任式において「油を注がれた者」を指し、やがてそれは「正しい治世をもつて国を治める理想的な王」や「救い主」を意味するようになりました。このメシアをギリシア語で表記すると、キリストとなります。したがって、イエス・キリストという名前は、イエス・救い主という意味です。イエスという名前は、一章三二節に「生まれてくる子をイエスと名づけなさい」とあるように、天使がマリアにあらわれ、生まれてくる子に名づけるように命じたものです。この名前は決して特殊なものではなく、ヘブライ語ヨシュア（イエシュア）をギリシア語で表記したものです。それは「神は救い」という意味です。このようにギリシア語で表記されているのは、当時の地中海世界の共通語がギリシア語だったからです。新約聖書はギリシア語の世界なのです。

一九節には、「マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた」と記されてい

ます。この言葉は一章三七節に出てくるマリアの言葉を思い起こさせます。マリアは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように」と答えています。羊飼いたちの驚きと喜びと讚美に満ちた激しい動きと、マリアの動こうにも動けない静けさは、クリスマスのお出来事に対する二つの対照的な態度を示しています。

では後半の話に入りましょう。すでに気づかれたように、このイエスの誕生物語には、二人の「全世界の救い主」が登場します。そして二人とも「平和の君」と仰がれています。一方は、政治の力により、軍備の力により、経済の力により、敵を打ち破り、「平和」を実現しようとした人物です。しかしこのローマ帝国も、やがて他の軍事力、つまりもつと強い敵によって滅ぼされてしまいました。歴史は、いかなる帝国も、文明も、永遠に続かないことを教えています。

他方、イエス・キリストが生まれた場所は、宮殿でも、旅先の宿屋でもなく、家畜小屋でした。これはもちろん両親が望んだことでも、また偶然的な出来事でもありませんでした。マリアはそれを神の意志と受けとめました。意外なことに、神は、最愛の御子の誕生の場として、家畜小屋の飼葉桶を選んだのです。

この出来事は、神は、私たちの求める豊かさの中ではなく、むしろ貧しさの中におられるこ

とを示しています。したがって、神はどこにおられるのかと問われるならば、「神は権力や富の中ではなく、むしろ小さく弱き者の中に、貧しき者の中におられる」というのが聖書のメッセージです。救い主イエスは飼い葉桶の中に生まれ、天使によるその救いの知らせは、まず辺境で働く羊飼いたちに伝えられました。神は弱く貧しい者のうちに現れるのです。

成長したイエス・キリストは、この神の意志に従って、力による平和ではなく、病む者、苦しむ者、貧しき者、社会から見捨てられた者、弱い立場にある者に寄り添う生き方により、神の国に備えようとなりました。それは、愛に生きる平和への道です。イエスの生き方と教えは「あなたの敵を愛せよ」という彼の言葉に示されています。敵を愛するとき、真の「平和」が訪れます。真の絆が回復されます。天使の「神に栄光、地に平和」との讚美の歌声は、すでにこのイエス・キリストの生涯を予告していました。「栄光」とは、神がこの世に現れるさまを表しており、私たちの思いと反対に、ここでは、その栄光の光は貧しい姿をとりました。それは、平和をもたらすためです。この平和は、人と人の間の平和だけでなく、なによりもまず神とひとの間の平和を意味しています。

しかし誰もが知る通り、この生き方は、決して簡単に実行できるものではありません。死ぬ覚悟がなければ不可能な道です。イエス・キリストは、この「敵を愛する」生き方を貫いた結果、

十字架にかけられ、その生涯を終えました。しかし神はこの生涯をよしとされ、彼を復活させました。ここからキリスト教が誕生します。

クリスマス、それは天使の歌声に合わせて「神に栄光、地に平和」と祈り、愛に生きるイエス・キリストの生涯を思い起こし、平和の実現に向かって、一歩踏み出す勇気がすでに与えられていること再確認するときです。イエスがその与えられた生を神の意志に従って捧げようとしたように、私たちも与えられた人生を感謝し、育み、この預かった命を神様にお返しするときまで、愛の人になろうと改めて決意するときです。

クリスマスの今日、貧しき私たちの間に宿られたイエス・キリスト共に、彼がその生涯をかけて実現された愛の優しさに包まれつつ、この場を去り、家に帰り、改めてマリアのように「これらの出来事をすべて心に納めて、思いめぐらして」みましよう。